社会連携事業

内山節氏講演会

所員　今　堀　洋　子
（地域創造学部准教授）

2017 年 11 月 22 日，哲学者の内山節先生を大学にお迎えして，「都市と田舎のつながり　－これからの社会デザインのかたち－」というタイトルで，ご講演をいただいた。図 1 に示すちらしの通り，講演会は，茨木市と追手門学院大学の連携講座として，学生だけでなく，市民の方にも公開する形で，北摂総合研究所の事業の一環として行われた。当日は，市民の方 60 人，学生 30 人，教員 10 人ほどが参加した。



図 1　内山節先生の講演会のちらし

内山節先生は，1950 年，東京生まれで，釣り好きが高じて，1970 年代より東京と群馬県上野村を往復して暮らしておられる，在野の哲学者である。主な著書に『労働過程論ノート』，『哲学の冒険』，『時間についての十二章』，『森にかよう道』，『貨幣の思想史』，『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』などがある。

内山先生のご講演内容を以下にまとめておく。

1. はじめに

群馬県上野村は，日航ジャンボ機が墜落した御巣鷹山で有名になった。冬は，雪で閉ざされているため，田舎に閉じこもっておらず，出稼ぎに行ったりして，都会と田舎の両方で生きていた。例えば，新潟や岩手では，酒づくりの出稼ぎ，山形では，大工の技を持った人たちが，冬の間，都会に行って仕事をしていた。上野村でも，人々は色々な仕事をしながら生きてきた。江戸時代は，養蚕と和紙が盛んであった。水田のない上野村では，山の斜面を桑畑にしていた。くずまゆを使って，でこぼこの糸で機織りし，紬をつくっていた。生糸は腐らず保存がきいたので，海外にも輸出された。

日本では，江戸時代から戦前まで，生糸が輸入の第一を占めていて，高価な値段で取引されていた。というのも，ヨーロッパの貴婦人が絹のストッキングをはいていたが，日本の絹が好まれていたのだという。ちなみに日本の生糸は今や壊滅的であるが，群馬県の生糸の生産量は，今でも全国 1 位である。

かつての上野村をはじめ田舎は，どこでも，さまざまな人々とのつながりをもち，たえず情報を取得していた。村人は，先に述べたように出稼ぎで都市に出かけいった。また，製品の仲買人や行商人，旅の僧侶・修験者が村に滞在していた。更には，お伊勢参り・富士山などの霊山などに，村から出かける人々がいた。このように，村人は決して，村の中に閉じこもっていたわけではなく，都市とのつながりを持っていた。戦後，単に市場だけで都市とつながるようになり，人間とのつながりを失い，閉じられた生活を強いられてしまっている。単に，田舎だけで考えるのではなく，都市との様々なつながりを持ちながら，お互い生きていかないといけない，それがなくなったことで，田舎が衰弱していった。

2. 地域の循環力，外との交流力

田舎では，かつては，地域内でまわっている物が非常に多かったが，今はどこでも，スーパーが出来てしまったため，地域の循環が低くなってしまっている。地域が力をつけるためには，もう一度，地域の循環力と，外との交流力の二つの相互性をもつ必要がある。だから，このふたつの要素をいかに回復していくかというのが，どこでも課題になっている。つまり，都市と田舎が相互につながりを有機的に取り戻すことが必要である。

3. 私の村，群馬県上野村では

上野村は，明治以降，合併をきらい，一度も市町村合併をしていない。600 年代から 1000 年間，村の広さが変わっていない。そして，農協や森林組合が独自にがんばっている。

上野村は，森林率が 96 パーセントを占める村である。であるから，森林を上手に使って持続可能な暮らしをしていく必要がある。現在，日本の林業も壊滅的で，50 年ものの木が一本 500 円とか 1000 円という値段しかついていない。そこで，上野村としては，森を活用して生きるために，今後の 50 年を見据え色々な取組をしている。森は手入れをした方が，森が健全になるので，森を整備している。間伐した木材は下まで運びだす，運び出した木材は，柱や床の間として良いのだが，現在は，木工用として使われている。村には，木工職人も 30 人ほどおり，おわん，おぼん，家具など，何でもつくれる。樹木を切るが，それは樹木を切ることが目的なわけではなく，あくまで森を健全に保つために切っている。また，ナラ材（ナラ，コナラ，ミズナラ）のおが屑による菌床づくりと茸の生産も行っている。そして，材として扱えない木が 60% ほどあるので，それらは木質系ペレットに加工される。木質系ペレットは，木材をチップにして，熱加工して，圧縮してつくられる。ボイラーの燃料や，発電として村で使われている。上野村では，このバイオマス発電と，小水力発電をあわせて，地域エネルギー 100% をめざしている。水力発電は，村のあちらこちらの水路の落差を使って発電を試みている。その際，水利権が課題になって，なかなか前に進んでいない。

地域内循環を考えた時，一番循環していないのがエネルギーである。かつてのエネルギーは，薪であったが，今は，石油，ガソリン，電気，エネルギーになっている。原子力発電やダムのようにエネルギーを作っていても，お金は都会に流れていってしまう。田舎は，エネルギーをお金で買うしかない。例えば，高知県は県民所得が少ない。実際は，太平洋に面しており豊かな漁場があり，自然も豊かで，農業も強い。いったいお金の流れはどう

なっているのだろうか？高知県民が支払っているものお金と，受け取っているお金で見てみる。農・漁・林業などの一次産業は超黒字であるが，二次産業はやや赤字である。そして第三次産業は，高知県の人が外の県で使うお金と，高知県の外の人が高知県で使うお金を比較すれば大幅黒字である。トータルで見た時，赤字になるハズがないが，エネルギーが全て輸入のために，大幅な赤字になってしまうのである。生きていくために，エネルギーをゼロにすることはできないので，人々はエネルギー問題で疲弊してしまっている。一方，東京や大阪など都会では，電力会社があるため，自給していないのに，お金が入ってくる仕組みになっている。このように，エネルギーが，もっとも地域循環できていない。そこで，上野村では，小水力発電とバイオマス発電を利用としているのである。

上野村は，人口 1256 人に対して，観光客が 21 万人とかなり多く，隠れた観光地である。美しい自然と，昔ながらの雰囲気を大切にした村らしさを活かし，森を使って生きる村をめざしている。人々は，開発された観光地では飽きてしまう。美しい自然を残し，観光資源をつくり，それをつなげていくことが大切である。ようやく，上野村がめざす方向が具体化してきた。

注目すべきは，三代前の村長が 1992 年（91 歳）まで，40 年 10 期連続で村長をしていた。その村長が，1970 代に，お正月に，「高度経済成長にのらず，あせることなく，村を守れ」と挨拶をした。そして「村の自然を守っていけば，いつか必ずトップランナーになれる」という村の方針を，上野村は，40 年間，ぶれずに，路線を変えずに，開発ゲームに乗らずにやってきた。続けることで，村がまとまりはじめた。上野村では，それぞれの職を担う人が，村の産業として捉えられており，村の産業全体で，社会的企業となっている。そして，社会的企業であるから，もうけを第一に考えていない。一番には，自分達の役割，使命を考えており，それぞれが，ミッションとして持続可能な地域のあり方を創り出している。山奥の村でも，持続できる村があること示している。

上野村は，村の人だけでなく，村を大事にし，村を守ろうとするすべての人々に開かれた村であり，その人達と一緒に村をつくっていっている。人口 1256 人のうち，I ターン者が 265 人で，それ以外に多くの都市の人達も協力している。循環度の高い村づくりを進めるときの「外」の人たちの役割が不可欠である。村外の人も，自分の村と思え，村の人達も，自分達だけで自己完結しない。都市の人達は，都市で暮らしながらも，田舎の暮しをどこかで味わう暮らし方をしている。片方に都会，もう片方に田舎があるから生きていける。お互い補いあいながら全体として豊かな暮らしをする。上野村は，外に開かれ村を，昔から意識的につくってきたのである。

例えば，木質ペレットを使って発電をするということを検討している時，上野村に適した発電機を，ドイツまで見に行った。ペレットを炭窯で蒸し焼きにし，発生したガスでディーゼルエンジンをまわすというもの。この方式で，33 パーセント熱効率があがった。また，都会のエネルギーの専門家の協力をで，キノコ栽培の横に発電機を置くことで，菌の自己発熱の熱を利用して（ヒートポンプ），9 から 10 ヶ月冷却するためのエネルギーの 90 %をカットし効率化をはかった事例などもある。このように，都会の人の協力があるからこそできることが村には多くある。

4. 今日の農山村への移住の動きについて

農山村に移住するということは，その地域の人間や，文化や，自然などの農山村的関係のなかに加わることを意味する。とすれば，都会にいながらにして，移住せずに農山村的関係に加わることも可能なはずである。都会の人が，村に関わってくれることは，村にとっても有益である。例えば，新しい技術を村に導入するとか，村の特産品を，結婚式の引き出物などに使うなど，なんとなく，いつも意識しておく。そういう人がたくさんいることが，村にとって重要。

5. 日本の伝統社会はどんな関係によってつくられていたのか

日本の伝統社会（共同体）の特徴として，人間同士のつながりだけでなく，人間と自然とのつながりもある。更には，ご先祖さまや，地域を創ってくれた人々（江戸時代にはご先祖さまと呼んでいた）などの死者とのつながりもある。また，歴史，文化，土着的な信仰との関係，外部との関係，それらが一体性をもって，伝統社会はつくられてきた。高齢化が進む，村での神楽や獅子舞などの伝統芸能を維持することが不可能になっている。であるから，村に入ってくる I ターンの人達にそれらを教える，あるいは，都会から祭りの手伝いに来てくれる人

たちに伝承するといった動きもある。このように，地域の伝統芸能を，支える都会の人たちの存在など，協力体制をつくりながら，内側に加わることで，今までと違う形を作っていくことが，これからの課題である。

6. まとめに代えて

これからは，どんなつながりが，どんな生きる世界や地域をつくるのか，が問われていく時代である。都市部においても，つくれるところから，少しずつつくっていくことが肝心。ただ働いて消費するだけの生活は NG。そのためにも，どういう協力体制が必要なのか，模索しながら進めていくことが重要である。

7. 質疑応答

質問 1）茨木市は都市と農村が混在している，そんな茨木市はどのようなつながりをつくっていったらよいのか？

内山先生）地域にどんな資源があるのか，どんな技能を持った人がいるかをさぐってみることが大事。

質問 2）その中で，追大生ができることは？

内山先生）面白い事例として，長野県の伊那市では，市内の保育園から中学校までが，地域の農家とつながりながら，生徒もお米や野菜づくりに関わり，調理もするという取組（図 2 参照）をしている。



図 2　伊那市学校給食あり方作業部報告書

質問 3）人工知能がますます発達すると，40 万人以上の仕事がなくなると言われている。その時，我々はどうしたら良いのか？

内山先生）AI が得意なことは，一つのことを繰り返し行うことである。一方，人は，完璧ではないが，臨機応変にいくつもの仕事ができる。英語の教師で考えた場合，英語を翻訳するということであれば AI にかなわないが，生徒の様子を見ながら，教えていくということは人間にしかできない。

内山先生の発する言葉は聴衆の身体に染み込んでいく。聴講していた学生達にとってもそうであったようだ。ある学生は，「大阪で生まれ育ったので，森林だらけの村というのは，馴染みもないし，そこでの生活もあまり想像できないが，村とのつながりを持てば，住まずとも移住と呼べるのではないかという話を聴いて，そういった輪に入っていくことができれば良いなと思った。」という感想を述べていた。